



『光の子として歩みなさい。』
エフェソの信徒への手紙 第5章8節

◎ 6月の予定

7日(火) 校内研修会

10日(金) 観劇(中)

14日(火) 聖書教室、尿検査(二次)

15日(水) 内科検診

17日(金) 教務委員会

18日(土) 東日本小学校教職員協議会

21日(火) 教職員協議会

24日(金) デイ・キャンプ(小3・4年)

理事会

29日(水) 期末試験(中)〜7月1日

◎ 7月の予定

2日(土) 学校説明会①

4日(月) 理事会・評議員会

8日(金) デイ・キャンプ(小1・2年)

15日(金) 教務委員会



春の遠足

久しぶりに電車に乗って遠足に行く
ことができました。たくさん歩いて、
登って…夜はよく眠れたことでしょう。



◎ 今月の行事から

観劇(中学校)

毎年楽しみにしていた観劇。新型コロナウイルスの影響で行くことができず、残念な思いをしていましたが、今年は3年ぶりに実施することになりました。校外に出ての活動となりますので、しっかりと感染予防対策をしようとして実施します。鑑賞する作品は、ディズニの有名な映画を題材にしたものということで、生徒達は今からとても楽しみにしています。

デイ・キャンプ(小3・小4)

新型コロナウイルスの影響で実施できなかった校内宿泊学習。昨年度に引き続き、デイ・キャンプとして、学校内で実施します。小3・小4の計26人。学内と大磯海岸でこの日しかできない特別な活動を行います。

小学校高学年になると、中学生と一緒にステパノ・サマー・キャンプに参加します。その準備学習の位置づけでもあるこのデイ・キャンプを経験し、一人ひとりが自分達でできることを増やしていけるようこの一日を大切にしていきたいと思えます。



共感的理解と共感疲労

校長 小川 正夫

若い頃、教育相談「カウンセリング」の研究で一年間ほど青山学院大学に通い「共感的理解」の大切さを学んだことがあります。

物事を見たり考えたりするときには、自分が経験した学習や知識だけで考えたり、判断し示唆したりせず、人はそれぞれに生活経験も異なれば、置かれている環境も異なり、必ずしも自分と同じように感じ考えるとは限らないので、助言したり示唆したりする前に、相手が置かれている立場を理解し、相手の想いをよく汲み取ることが大切だと教わりました。

当時はノンディレクティブカウンセリング「非指示的相談」ということばが多く用いられていました。つまり、あくまでも相手が自分自身で納得する解決方法を見出せるように協力し支援することが大切で、解答を出してあげることではないと学んだことがあります。

この三か月、ロシアのウクライナへの侵攻で被災者の情報が報道されるたびに、自分が第二次世界大戦の渦中であってアメリカ空軍による連日連夜の空襲警報や絨毯爆撃により街が破壊され、焼き尽くされ、たくさんの死者を目的の当たりにした当時の情景や様々な音、人々の表情は、記憶に鮮やかで、いまだに忘れることができません。

空爆のもとに生活した経験がある私にとつ

ては、ウクライナの悲惨な状況は他人事とは思えず、心に重くのしかかり、世界中で難民生活を強いられるのを聞くと、いまだに八十年前のできごとがPTSD「心的ストレス」となっているように思います。

コロナのパンデミックが落ち着き始めたころもあり、観光旅行で知床半島沖に向かつて観光船で沖合を航行中、強風と荒海に巻き込まれ、エンジンが故障、船体の一部が破損、救助信号も正常に働かず遭難。客船は浸水し、百メートルの海底に沈没し、乗船者全員が行方不明となり、数人が遺体となって発見されたという報道も、本来楽しい思い出になるはずが、一瞬のうちに悲しみのどん底に置かれてしまい、知床沖の海底に眠る方々や残されたご家族の悲しみはどのようなことをしても癒されることはないと思います。

米国では、度々繰り返される学校での無差別銃撃で多数の生徒や教師が死傷して、米国特有の事件が起こるたびに銃規制が問われますが、国民に銃の所有が法律で保障されている様で、先日も前大統領トランプは、一部の悪魔の犯行が原因で、善良な市民から銃を取り上げるな、教師も拳銃を携え、防衛せよと言い、現大統領バイデンはこんな事件が繰り返されるのは米国だけだ、今こそ銃規制すべきだと言います。

どちらにしても、奪われた命はかえらず、やりきれない思いですが、どうすることもで

きない無力感が増すばかりです。

この三か月、私自身、精神的にかなり落ち込んでいたように思います。精神的に疲労感が続いていたので、何故かと原因と症状を考えていましたら、「共感疲労」という言葉に思い当たりました。

「共感疲労」の症状や事例の項目にたくさん当てはまり、成程と、何となく納得しながら、若い頃、当時、娘に言われた言葉を思い出しました。「パパはカウンセラーには向いていんじゃないの、相手の悩みをみんな抱え込んでしまうところが、自分で悩んでいるみたい」。成程と思いつつありますが、もう性格になっていくようにも思います。また日本人に多くみられるという説もあり、仕方がないと思っています。

症状と原因がわかれば、「レジリエント」(心の回復力)を考えればよいので、日常、子ども達や保護者の心に寄り添う心掛けを自分に向ければよいことに気がつきました。焦らずにセルフカウンセリングを始めました。

百の問いには百の答えがあるはずだから、決定的な一つの答えを期待しようと思わないこと。自分のことは自分が一番よく知っていると知らないこと。他人は自分では気が付かない短所や長所をよく見ていることを知ること。思い通りにいかないとき他人や周囲のせいにならないこと。神様は、決して悪いようにはなさらないと信じることもできません。

12年にフランスでつくられた「世界の果ての通学路」というドキュメンタリ映画があります。登場するのは、異なる地域に住む4人の子どもたち。彼らがそれぞれ何キロも何時間もかけて学校に通うエピソードが描かれています。象を避けてサバンナを進む少年、毎週22キロの山岳地帯を歩いていく少女、馬に乗って通う兄妹、兄弟に助けられて悪路を行く車いすの少年。10歳前後の子どもたちがこんな大変な思いをして学校に行くなんて…と思わずにはいられません。通学というより、「旅」と表現する方が相応しく思えます。

そして、旅立つ彼らを送り出す家族も映し出されます。文化的背景は違いますが、共通しているのは、子どもには教育が必要と考えていることでした。「私らのようになっちゃいけない。勉強して賢くなつて人生を切り開くんだ。」という家族の言葉が響きます。

その映画を観ると、学校に通うのは当たり前ではないのだと気づかされます。学校に通うことが私たちの意識にこれほどまでに浸透しているのだと改めて思いました。「学校に行くのが嫌だな」と思うのも、学校に通うことが当たり前だからという裏返しの部分もあるでしょう。実は私たちはとても恵まれた、いえ贅沢な環境で過ごしているのです。

映画では、彼らはいろんな困難を乗り越えて、ついに(！)学校に辿り着きます。そのときの彼らのうれしそうな表情、輝いている目がとても印象的でした。そして学校に通うことをとても誇りに思っていることが伝わってきました。「立派な大人になりたい」「僕の家は貧乏だけど学校に行かせられる」「ちゃんとした教育を受けたい」「将来パイロットになりたい」…。学校に行つて、何かを得ようという明確な目的と意志をもっています。

本学園でも、この春から環境が変わった小学生・中学生が大勢いて、中にはまさに旅立つように緊張を抱えて登校している子もいるでしょう。一日一日を大切に頑張っていることを認めていきたいと思えます。どこの世界の子どもたちも同じです。知りたい、分りたい、できるようにになりたいという気持ちをもっています。それに応えるように、私たち大人が係わつていく責任があります。

気をつけなければならぬのは、子どもたちのそういう気持ちを奪つてしまうことです。自分がしなくても誰かがしてくれる、自分が考えなくても誰かが考えて決めてくれる、自分が分かるうとしなくても誰かが分かるように教えてくれる、自分が言葉を発しなくても相手が分かってくれる…。彼らのそのような場面を見たことはないでしょうか。彼らを支援しているはずの私たちの行動が、逆効果になつてしまっていないでしょうか。

それらは、彼らの不安や自信のなさ、特性

などに因るものがあると思いますが、一つひとつ解きほぐして導いていくことができたらと考えています。今はぎこちなくても、ルールを理解して行動し、同時に相手のことや周りのことに意識を向けるようになり、将来の土台を築いてほしいと願います。

最後にサバンナを「通学」していた少年が来日した時のインタビューを一部紹介します。「日本の子どもたちに伝えたい。学校に通つて勉強することは当たり前じゃありません。学校に行けることに感謝すべきだし、学校に通う理由を自分に問いかけるべきだ。」「明日苦しまないためにチャンスを生かすんだ。」「先生から何かを学び、友達と付き合うこと。生きていくためには多くのことが必要だ。自分を空っぽにして学校に行き、先生からいろいろ学んで友達と付き合うんだ。道徳的な活動が自分を助けてくれる。学校に行かないでいるとチャンス逃すことになる。なぜなら学校というところは人間にとつてたくさんいいものが詰まった場所だからね。だから学校へは毎日通つてほしい。どんな学校でもいい、とにかく通うんだ。学校は物理的にも気持ち的にも、いいものをもたらしてくれる場所だ。」

学ぶことの楽しさは決して娯楽的な楽しさではないと、私たち大人は知っています。子どもたちに学ぶことの尊さを知ってほしいと思いますし、それに応えることができる働きをしたいと願っています。

「毎日が楽しい学校」

教諭 西村 哲臣

6月になりました。さわやかな日もあれば、日中汗ばむ陽気の時もあります。3年生も毎日元気に登校し、勉強する姿も一段と3年生らしくなってきました。教室も窓を開けると山の方から風が吹き、木々の緑を揺らしながら初夏の風を届けてくれる季節です。

以前学校で子どもに「先生はどうして先生になったのですか？」と質問されたことがありました。いきなりの質問にささか戸惑ったのですが「毎日が楽しいからだよ」とちょっとカッコつけて答えた記憶があります。けれども自分自身なぜ先生になりたいと思ったのか、正直な動機を今でもはっきり覚えていません。

私の父は小学校の先生をしていました。先生という仕事をしている父の姿はまだ当時幼かった私の記憶にいくつかの印象を与えてくれました。運動会を見に行った時たくさんの子どもたちに囲まれ笑う楽しそうな父の笑顔。家でガリ版にテストやお便りを作っている姿。夏休みの学校に呼ばれ、誰もいないプールで泳がせてもらったり、クローンを教えてもらったこともありました。食前の祈りや感謝の言葉を大切にし、悪いことをすると怒られ、授業

参観ではたくさんのお母さんに混ざって一人父だけが男親で来ていたのはうれしさというより恥ずかしい記憶でした。当時よく湘南の海まで家族で行き、ひぐらしの声を聞きながら海沿いの道を車で帰った記憶もあります。そんな幼少のころ父からももらったたくさんの記憶があり、中学・高校を卒業するころ「先生って楽しそう、先生になりたい」と思うようになりまし。大学卒業後小学校の免許を取得するために臨時的任用教員になり通信で免許を取得したあのころから数えてずいぶん長い間今の仕事に携わらせて頂きました。しかし未だにいろいろなことを教えてくれるのは毎年出会う多くの子どもたちです。私自身思いつかないような考え方や、とらえ方。核心をつくつぶやきや発想。純粋で正直な言葉。悩む顔、泣いた顔、笑顔・・・。

父を見て先生という仕事にあこがれを持ち勉強する中で教えていくことの難しさや大切さを学び、そして何よりたくさんの子どもたちから日々のエネルギーをもらい今日に至っています。

以前も書かせていただきましたが「教育」という字を様々な漢字に当てはめて考えると学びの姿勢を改めて考えることができます。

「今日行く」（毎日お元気に学校に行く）

「強育」（力でねじ伏せて育てる）

「協育」（力を合わせて育む）

「狂育」（周りを見ずに自分勝手に・・・）

「恐育」（威圧的に教え込んでいく）

「響育」（心に響くような育み）

「鏡育」（よきお手本となるような育て）

「驚育」（日々の驚きと新鮮な育み）

「狭育」（狭い考え方の育み）

たくさんの「きょういく」がありますが私は「共育」、この言葉が一番好きです。意味は（共に育み、共に育つ）と解釈しています。

聖ステパノ学園小学校でも朝、まだ誰も登校していない教室の電気をつけ、窓を開け机と椅子を見渡すと、今年の13人一人一人の顔が浮かんできます。今日はどんな一日になるかな・・・。どんな発見があるかな・・・。どこまでこの子達に寄り添って理解し合えるかな・・・。そんなことを考えながら始まる一日を大切にしながら、これからも先生という仕事に対して向き合い、努力していきたいです。そして、できることなら子どもたちにも「今日も学校楽しかった。明日も学校楽しみ！」と思ってもらえるようにしていきたいです。引き続き多くの方々との交わりとつながりの中で学校生活を過ごし、集団生活の中で社会性を身に付け、人を思いやり、やさしい気持ちを持ち、心の豊かな人になるよう「共育」を続けていきたいです。



「心を燃やせ。」日本をはじめ世界中で人氣を博し、漫画やアニメ、映画化にまで及んだ『鬼滅の刃』(吾峠呼世晴)のこのセリフは、作中で登場人物である炎柱の煉獄杏寿郎が主人公に言い遺した言葉として、読者や視聴者の心を大いに揺さぶりました。「心を燃やす」とは、一体何なのでしょう。情熱で燃える心、怒りに燃える心、悔しさをバネに燃やす心、やる気で燃える心：心が燃えるきっかけが、人それぞれ、多種多様にあるからこそ、このセリフが多くの人々の琴線に触れたのではないのでしょうか。

さて、私は子ども達から伝授してもらって初めてこのセリフを耳にしました。「心を燃やせ」が誰の言葉で、どのように発されたかをストーリーとともに切々と語る彼らの様子は、まさに心が燃えているかのようでした。その一方で、私はこのような聖書の御言葉を想起していました。

「二人は、『道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか』と語り合った。」(ルカによる福音書二十四章三十二節)これは、イエスが十字架にかかって死なれ、三日後に復活された直後、二人の弟子が歩いている途上にその姿を現されたときの御言葉

です。イエスの十字架の死から復活したという情報を知り、その出来事について論じあっていた二人の弟子たちは、よみがえられたイエスが実際に現れ、真横で一緒に歩いているにも関わらず、それがイエスだとは気が付きませんでした。二人の心の目がその時はまだ閉ざされていたからです。しかし、歩く道々、聖書を解き明かし、十字架と復活について語る謎の人物の言葉があまりにも興味深かった二人は、目的地につくとその人物を食事に招待しました。そこで祝福の祈りを始めた瞬間、初めて、二人の弟子たちはその人物がイエスだということに気づきました。しかしその瞬間、イエスの姿は彼らの目には見えなくなっていたのです。その時に弟子たちは、「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」と、イエスが共にいてくださったことを思い起こしたのです。きっと、姿がみえなくなった後も、この二人の弟子の心は、聖霊の灯で明々といつまでも燃え続けていたことでしょう。

ステパノでの生活もまた、朝の礼拝に始まり、終業の祈りを捧げる瞬間まで、いつもイエス様が心の中で一緒にいてくださることを信じています。私が子ども達と共に過ごせる時間は、子ども達が学校にいる間に限られませんが、イエス様は違います。生まれる前から、神様の御元へ帰る日までずっと、心の中で聖霊の灯りを照らして下さるのです。私達の心

は、嬉しい時も、悲しい時も、苦しい時も、試練の時も、おいしい時も：どんな時も必ず、聖霊の火で燃えています。しかし、聖霊は私達の心に押し入ってくるものではありません。「見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれか私の声を聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と共に食事をし、彼もまた、わたしと共に食事をするのである。」(ヨハネの黙示録三章二十節)イエス様は戸をたたき、こちらが戸を開けて「どうぞ」と言うまで待つていてくださるのです。

何事も、心を燃やして挑戦し、新たな発見をし成長していくことには勇氣が伴います。子ども達が過ごす学校には、そのような経験がたくさんあります。私自身も、なかなか一歩を踏み出すことができない時があります。でも、聖霊の火が点いていけば、神様のご計画のうちに強く、雄々しく歩むことができ、その計画は必ず、どの経験も最後には益となることが約束されています。だからこそ、戸口でたたいておられるイエス様をお迎えし、聖霊の火を齎すために、心の戸を開けて「どうぞ」と言える、最初の勇氣を大切にしたいと思えます。

活気に溢れ、誰よりも素直で疑うことを知らないステパノの子ども達の姿に倣って、私自身も同じ神様を見上げ、イエス様を心にお迎えしつつ、いつまでも子ども達とともに心を燃やし続けたい、と願ってやみません。

〔小学校〕遠足の日の日記が、 （1・2年 吾妻山公園）

*一年生には教員からインタビューしました

はやくすべれたので、ローラーすべりだいがたのしかった。
（小1 AS）

みんなでおべんとうをたべたのがうれしかった。
（小1 IN）

きょうは、えんそくにきました。でんしやにのりました。
あづま山こうえんであそびました。おべんとうと、おやつをたべました。
（小2 NT）

きょうは、えんそくにきました。ローラーすべりだいが、たのしかったです。おべんとうがおいしかったです。かいだんがたくさんありました。
（小2 NH）

今日は、遠足へ行きました。ローラーすべり台で遊びました。すごく楽しかったです。だけど、つかれたから今日の日記はこれでおしまいです。
（小2 EY）



（3・4年 湘南平）

遠足のこと

のぼるのが大変でした。おりるのも大変でした。西村先生がてだつてくれました。山の上では、先生のお話を聞きました。おべんとうは美味しかったです。トンビが空をとんで、すてきでした。おやつはグッピーラムネはおいしい味で、トンビを見てゴロゴロしながらたべました。なんでゴロゴロしたのかというと、お空を見れるからです。
（小3 NK）



しょうなんだいら公園で、Rちゃんがステパノペンダントを作りました。はじめてつくるペンダントは、かくべつでした。おべんとうに、にこみハンバーグが入っていました。
（小3 NK）

遠足で4年生とおにごっこをして、Mがいちばん早かった。あと、T君がちよう足がはやくてびっくりした。さとう先生とフリスビーをしてたのしかった。その後おべんとうがおいしかった。帰り、どろだらけな道がきれいになって、すつきりした。
（小3 KM）

（5・6年 鎌倉・七里ヶ浜）

今日は、鎌倉に遠足に行きました。藤沢から江ノ電に乗って行くのですが、鎌倉高校前から七里ヶ浜の間の景色がきれいでした。

その後、高徳院に行つて全長十三メートルの大仏を見て、リスを探して長谷寺に行つて洞窟に入つたり、寺の中に入つて巨大な像を見たり、見晴らし台で弁当を食べたりしました。

その寺は少し高い所にあつたので、そこから鎌倉の町を見下ろしたら結構きれいでした。
（小六 IN）

今日、遠足に行きました。江ノ電に乗つて、鎌倉に行きました。高徳院で大仏様を見ました。大仏様の背中の上に、ドアがありました。昔、大仏様にはお家がありました。津波に流されてしまいました。今は、大仏様のお家の土台だけがあります。
遠足は楽しかったです。
（小六 SA）



「中学校」中学校の遠足は、「鎌倉殿の十三人」をテーマに、班別行動で鎌倉の地を歩きました。

「自然の要塞・鎌倉」

(中一 H U)

「エイエイオー。」ここで源氏の兵は戦勝を祈願したのか。春の遠足で僕が一番印象に残ったのは源氏山公園に行った事だ。

公園までの道のりは「切通し」である。それは道という道ではなく、想像以上に険しいがけだった。その時はあまりに疲れていて將軍様がそこを通ったんだと実感できなかった。先輩と支え合いながら登って行った趣味の話や弁当の中身の話で自分達をばげました。同学年だけでなく先輩とも自然と仲良くなれたのが嬉しかった。そして弁当の中身はとんかつで美味しかった。切通しを登り切ると、頼朝像がでむかえてくれた。頼朝はたくましい顔をしていた。

行ってみて事前指導で教わったことにも納得だった。海あり山ありで、攻め込めない。まさに自然の要塞だ。景色やふんいきが良く、僕は鎌倉が気に入った。

「古都めぐる鎌倉の名所」
(中二 O T)

5月10日にあった春の遠足を紹介します。最初は、東海道線に乗って大船に行き、目的地の鎌倉に向かいました。改札に行く途中



に早速、鎌倉殿の13人の公式キャラクターが出てきました。行った事がない所ばかりだったのでとても楽しめました。

鶴岡八幡宮に着いたら、記念撮影をして班ごとに分かれて行きました。八幡宮が大きく、橋がオシャレに感じました。

班行動をした時に「いい所だなあ」と思った場所が、荏柄天神社です。まず門に入った時に神社にふさわしい感じがしました。

2つ目は、建長興国禅寺です。庭園は座っている静かでも落ち着きました。

次はいよいよお弁当ということで源氏山公園です。亀ヶ谷坂はキツかったけれど、着いた時はとても解放感がありました。

最後は鎌倉文化交流館に行きました。特に階段から見ると景色がとてもきれいでした。終わりが近づいて来てさびしくなりました。

帰りは江ノ電経由で帰りましたが、疲れのあまり寝てしまい、路面区画を見忘れてしまいました。次は見たいと思います！

「行きから帰りまで楽しかった遠足」
(中三 O M)

中学三年生にして初めての春の遠足だったのでドキドキしました。加えて班長になったので、昨日の今日までずっと不安でした。

中学二年の時と一年の時だったら、「楽しみだなく」や、「体力落ちてないかな」とプラスな方で考えていたと思います。やっぱり昔



の中学三年生も色々不安になりながらやってきたのかな、と今思うようになりました。行っている途中は道に迷いながらうろうろして、無事に着けるかな？と思っていました。が、意外と楽しんでみたみたいでずっと笑顔だったと思います。

一番楽しかったところと思いい出に残ったところは、「大河ドラマ館」です。大河ドラマ館で、印象に残ったところは、景色が変わるプロジェクトです。それは、一定の場所に立って手を頭の高さにもつていくと、景色が変わるという

ちょっとしたアトラクションのようなところですが、それをやってみたくはないとは思ったのですが、人の目があったて恥ずかしかったけれど、「みんなでやろうよ」となり、まずは中三

だけでやりました。結果、何も起こらないでただ恥ずかしくなっただけでした。ですが、先生や他のメンバーたちも加わってやってみたら変わったので、その時が一番うれしかったです。大河ドラマ館と同じくらい好きだな

〜と思ったところが、鎌倉歴史文化交流館です。そこでは、展示以外に外にもものんびりできるところがあって、最後の方はそこでお話したりしました。中の展示物は色々見ごたえ

があり、また家族とともに行きたいな〜と思いました。

行きから帰りまで笑っていられた最高の遠足になりました。





今号は、中学校・数学科の難波寛先生にお話を伺いました。

——子どもの頃から算数がお好きでしたか。

「数学の教員だった父への憧れもあり、自然と数学の先生を目指すようになりました。」

大学では、数学科での専攻の他に、入学後に出会った数学史の学びが楽しく、教科書には載らない数学の秘密など子ども達に伝えられるものがあると思えました。現在子ども達が学校で学ぶ数体系は、明治期に輸入されたヨーロッパ由来の洋算と言われるものです。例えば、証明は、論理を積み上げていく世界で、日本の数学にはない概念です。一方、日本の体系である和算は、ねずみ算や俵算などの言葉が残っていますが、古くは平安時代の万葉集にも、九九が登場しています。九九では、 1×1 を「いんいちがいち」と唱えますが、「が」の部分には、答えの十の位はゼロである、という意味をもっているそうです。数学の学びは、直感的に答えを求めたくありませんが、こうした背景の歴史や物語を知り、じっくり向き合うと楽しいものですね。

子どもによっても、クラスによっても、理解の方法は人それぞれなので、視覚で理解する方法、聴覚で覚える方法などさまざまな取

り組みや説明方法を悩み、考える日々です。大学のマジック研究会で、手順を自分で組み立ててステージに立ち、観客の様子を見ながら動いたことが、教員としての今にもつながるものを感じます」

——本年度も卒業学年の担任をされています。「昨年度、初めて担任として卒業生を送り出しました。大きな一歩を踏み出す大切な時期、とにかく責任を感じた一年でしたが、がんばろうとする子ども達の成長を近くで見られる機会が多く、嬉しい経験も多くありました。進路選択は、一人一人とじっくり話をして、本人の希望やご家族の想いを聞き、一緒に相談しながら、それぞれが充実した生活を過ごせる場所を探す時間が大切だと感じました。卒業生が近況報告に訪れ、楽しく過ごしている姿を見られる時に、大きな喜びを感じます。」

本校に着任して約十年、前任校では体調を崩した時期もありますが、小川正夫学園長から、『自分のことを大切に、それでこそ子ども達のことも大切にできるのでは』という言葉をいただき、多忙の中でも、違う視点で物事を見ること、焦らず考えを深める時間を持つことを大切にしたいと思っています」

穏やかな雰囲気でお話になる難波先生、「数学の時間に眠くなる、と生徒に言われます」と笑う柔らかさと、一人一人の将来に真直に向き合って下さるお姿が印象的でした。

STEPHEN'S NEWS

○石垣にマリーゴールド植栽
評議員の鈴木先生より、マリーゴールドをご贈りいただきました。石垣に植栽し、可愛らしいオレンジ色に石垣が彩られました。
ご寄贈賜りました、心より御礼申し上げます。



○小学一・二年生のさつまいも畑

小学一・二年生が、赤田先生お手製の畑に、さつまいもの苗を植えました。美味しいさつまいもがたくさんできるように、大切に育てています。



【編集後記】

小中全学年の遠足が無事に終わりました。五月雨が降り続く不安定な気候の中、当日だけは夏の始まりを感じさせるような晴れ模様でした。普段の学校では見ることができない児童生徒の良さが発揮されていました。(り)

代表者 学園長 小川 正夫
発行者 ステパノ学園小学校・中学校
ステパノだより編集委員会

〒255-0003 神奈川県中郡大磯町大磯868

TEL 0463-61-1298
FAX 0463-61-9739
<http://www.stephen-oiso.ed.jp>

二〇二二年六月十四日(火)発行 第266号